

## 「開け」

マルコの福音書 7:31～37

### はじめに

聖書とは、神が約束されたその内容が詳細に記された契約書であり、またその約束を必ず果たすという誓約書です。そして神がなそうとしておられることが記された、神の計画書、企画書とも言えます。ですからたとえ一見何の変哲もないただの状況説明、情景描写のように見える記述にも、その断片を見出すことができるのです。特にこの福音書は、神の御子イエシュアについて記されたすべての言動、行動、そこに記された人名や地名には、その順序に至るまで、すべてその神のご計画を表す「型」たとえとして見ることができます。今日もそのような視点で聖書の記述の一つひとつを捉え、私たちの心と思いを、少しでも神のご計画に、神の御心に寄り添わせていただきましょう。

### 1. イエスは再び

【新改訳 2017】 マルコの福音書

7:31 イエスは再びツロの地方を出て、シドンを通り、デカポリス地方を通り抜けて、ガリラヤ湖に  
来られた。

イエシュアは、「再び…ガリラヤ湖に来られ」ました。ガリラヤ湖にはヘブル語のガーラル(גָּרַל)「転がす」という意味があると考えられます。

【新改訳 2017】 創世記

29:1 ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。

29:2 ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

この記述はアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが見つけたある井戸についてのものです。その井戸には大きな石のふたがあり、その石のふたを「転がして」という箇所に聖書で最初のガーラルが使われています。羊の群れが集まる時に、石が転がされていたという事実から、このガーラルという言葉には本来、「群れが集められる」というような意味合い、概念があると考えられます。ですからこのイエシュアが「再び…ガリラヤ湖に来られた。」という出来事には、**イエシュアが再び来られ、ご自分の羊の群れを集められる**、というやがて起こる神のご計画が「型」として表されていると考えられます。また「ツロの地方を出て、シドンを通り…」ともありますが、このツロとシドンという二つの地名の組み合わせに対して、ヨエル書にこのような預言が記されています。

【新改訳 2017】ヨエル書

3:1 「見よ。わたしがユダとエルサレムを回復させるその日、その時…

3:4 ツロとシドン、またペリシテの全地域よ。おまえたちは、わたしにとって何なのか。わたしに報復しようとするのか。もしわたしに報復しようとしているなら、わたしはただちに、速やかに、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返す。

3:5 わたしの銀と金をおまえたちが奪い、わたしのすばらしい財宝をおまえたちの神殿へ運び、

3:6 ユダの人々とエルサレムの人々をギリシア人に売って、彼らの領土から遠く離れさせたからだ。

3:7 見よ。わたしは、おまえたちが彼らを売ったその場所から彼ら呼び戻して、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返し…

「ユダの人々とエルサレムの人々」すなわちイスラエルの民、ユダヤ人たちを奴隷として売り飛ばし、世界中に離散させた存在としてこのツロとシドンが記されています。しかし神はやがて必ず「彼らを売ったその場所から彼ら呼び戻す」と宣言しておられます。ですからイエシュアが「ツロの地方を出て、シドンを通り…」そして「再び…ガリラヤ湖に来られた。」というこの行為には、イエシュアが再び地上に来られ、世界中に離散したイスラエルの民、ユダヤ人たちを、ご自分の羊の群れとして呼び集められる、という神のご計画が「型」として表されていると考えられます。またこのツロとシドンについて、上記のヨエルのものと同じ内容の預言がエゼキエル書 28 章にも記されており、そこにはツロとシドンが、神の前に高ぶる敵、悪魔と呼ばれるサタン象徴として記されており、これに対する神の報復、裁き「わたしはただちに、速やかに、おまえたちへの報いをおまえたちの頭上に返す。」という神のご計画がより詳細に預言されています。

イエシュアが再びこの地上に来られること、イエシュアの地上再臨の出来事は、イスラエルの民にとっては喜ばしい「救い」となりますが、神の敵サタンとそれに従う者、すなわちイスラエルに敵対する者たちにとっては神の怒り、裁きを受ける時であり、「滅び」の時です。ですからイエシュアが再び来られる時、この「救いと滅び」が同時に起こります。その事実が、神のご計画が、イエシュアが「ツロの地方を出て、シドンを通り…」そして「再び…ガリラヤ湖に来られた。」というこの行為の中に「型」として表されていると考えられます。

そしてさらに、イエシュアは「デカポリス地方を通り抜けて…」とも記されています。「通り抜けて」と訳されていますが、ヘブル語ではここにターヴェク(תָּוֶק)「中、間、真中」という意味の言葉が使われています。デカポリスとはデカ(10)とポリス(町)という二つのギリシア語からなる「10の町」という意味の地名です。ヘブル語ではエセル(עֶשֶׂר)となり、アーリーム(אֶרֶם)となります。「10」を意味するヘブル語エセル(עֶשֶׂר)は名詞ですが、動詞になると綴りは全く同じですがアーサル(אָסַר)となり、その意味は「十分の一をささげる」となります。この最初の言及は創世記 28 章です。

【新改訳 2017】創世記

28:10 ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった。

28:11 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

28:12 すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

これはヤコブすなわちイスラエルに対する神の約束、ご計画と、それを聞いたヤコブの言動を記した箇所です。この時故郷を離れようとしていたヤコブは「無事に父の家に帰らせてくださるなら」と言っていますが、神のイスラエルの子孫に対するご計画が語られている以上、これは今日も世界中に離散しているイスラエルの民、ユダヤ人たちが、やがてすべてイスラエルの地に帰ることを指し示した預言的な祈りであると考えられます。そしてその時「神の家」すなわち神のご計画の完成である「神の国」が建てられるという預言であると考えられ、ここに聖書で最初のアーサル「十分の一を必ずあなたに献げます。」が使われています。ですからデカポリス「10の町」、エセルへアーリームの、その「中、間、真中」にイエシュアが来られたという記述には、イスラエルの中心、首都エルサレムに、王なるメシアとしてイエシュアが来られる時、「神の国」は建て上げられ、上記の神がイスラエルに約束されたご計画、すなわち「あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」というご計画が実現、成就することが表されていると考えられます。

このように、「イエスは再びツロの地方を出て、シドンを通り、デカポリス地方を通り抜けて、ガリラヤ湖に来られた。」という記述は、単なる背景、状況説明というだけではありません。神のご計画の完成が凝縮され「型」として表されたものであると考えることができます。

## 2. 耳が聞こえず口のきけない人

【新改訳 2017】マルコの福音書

7:32 人々は、耳が聞こえず口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださいと懇願した。

7:33 そこで、イエスはその人だけを群衆の中から連れ出し、ご自分の指を彼の両耳に入れ、それから唾を付けてその舌にさわられた。

イエシュアのみもとにひとりの人が連れて来られました。彼は「耳が聞こえず口のきけない」状態でした。ヘブル語で「耳の聞こえない人」のことをヘーレーシュ(שָׁרֵשׁ)、「口のきけない人」をイッレーム(אֵלֵם)と言い、どちらも出エジプト記 4:11 が最初の言及です。

【新改訳 2017】出エジプト記

4:11 【主】は彼に言われた。「人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし、【主】ではないか。

4:12 今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。」

これはイスラエルの民がエジプトの奴隷であった時代、彼らをそこから解放するために、神がモーセをお選びになり、遣わすという場面です。このようにヘーレーシュ、そしてイッレームとは本来、神が「とも にあって…語るべきことを教える。」存在、このモーセのような神のしもべとなることを表した言葉であると考えられます。イエシュアのみもとに連れて来られたこの「耳が聞こえず口のきけない人」とは、イエシュアが再臨される時にみもとに集められる、イスラエルの民を表していると考えられます。イスラエルの民、ユダヤ人たちは世界の国々の民の中から、神がお選びになった神の所有の民、聖なる国民です。その事実が次の「そこで、イエスはその人だけを群衆の中から連れ出し…」という様子には表されていると考えられます。「連れ出し」と訳されたラーカハ(קָחָה)は本来、最初の人であるアダムがエデンの園に置かれたことを指し示した言葉です。(創世記 2:15) これはかつて地を支配せよと神がお命じになった(創世記 1:28) アダムのような存在として、神はイスラエルの民をお選びになっておられるということを表したものであると考えられます。

そしてイエシュアは「指を彼の両耳に入れ」られました。「指」はヘブル語でエツバ(עֲצָבָה)と言い、本来は「神の指」と訳され、かつてイスラエルがエジプトの奴隷であった時、イスラエルを解放せよという神のご命令に対し、これを頑なに拒んだファラオ、エジプトの王に対する神の怒り、「十の災い」と呼ばれる神の裁きを指し示した言葉です(出エジプト記 8:15)。また「耳」オーゼン(אָזְנוֹ)は本来、イスラエルの父祖アブラハムの妻を奪ったために神の呪いを受けたゲラルの王アピメレクとその家を指し示した言葉で(創世記 20:8)、どちらもイスラエルの民に危害を加えた、先ほどのツロとシドンのように、イスラエルに敵対した者たちへの、神の報復、神の怒り、裁きが表された言葉であると考えられます。このように、言葉や表現、状況を変えつつも、同じ内容の神のご計画「救いと滅び」についての事実が、繰り返して指し示され、強調されていると考えられます。

またイエシュアは「唾を付けてその舌にさわられた」ともあります。ここで使われている「唾を吐く」ことを意味するヤーラク(יָרַק)は最初、以下のような出来事で使われました。

【新改訳 2017】民数記

12:13 モーセは【主】に叫んだ。「神よ、どうか彼女を癒やしてください。」

12:14 しかし【主】はモーセに言われた。「もし彼女の父が彼女の顔に唾したら、彼女は七日間、恥をかかされることにならないか。彼女を七日間、宿営の外に締め出しておかなければならない。その後で彼女は戻ることができる。」

これはモーセの姉ミリアムが、神がモーセを選ばれたことに不満をもらし、眩き、その結果神の怒りを買って、ツアラアトで打たれたという出来事です。神はこれを「彼女の父が彼女の顔に唾したら」と表現され、ここに聖書で最初のヤーラクが使われています。モーセのとりなしによってミリアムは七日後に癒され、民の中に戻されました。このミリアムの姿は、イスラエルの民の「型」だと考えられます。なぜならイスラエルの民もまたその歴史の中で神に逆らい、ついに自分たちの国を失い、その国土から追い出されたからです。しかしそれは永久的なものではなく、やがてモーセ…ではなくイエシュアによって「戻ることができる」ということが表されていると考えられます。このような神のご計画が、イエシュアが唾をした様子には表されていると考えられます。

そしてイエシュアはその唾を、今度は彼の「舌に」つけられました。「舌」はヘブル語でラーション(לשון)と言ひ、本来は様々な言語、それを話す国々の民を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】創世記

10:5 これらから島々の国民が分かれ出た。それぞれの地に、言語ごとに、その氏族にしたがって、国民となった。

ここで「言語」と訳されているのが聖書で最初のラーションです。このように、「唾」はイエシュアによって戻される、集められるイスラエルの民を、そしてこの「舌」はその他の国々の民を表していると考えられ、イエシュアが「唾を付けてその舌にさわられた」というこの行為には、イスラエルに与えられる国々の民、すなわちイスラエルによってすべての国々は統治、支配されるようになる、という神のご計画が表されていると考えられます。

### 3. 天を見上げ

【新改訳 2017】マルコの福音書

7:34 そして天を見上げ、深く息をして、その人に「エパタ」、すなわち「開け」と言われた。

7:35 すると、すぐに彼の耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話せるようになった。

またイエシュアは「天を見上げ」られました。ここにはナーヴァト(נבט)という言葉が使われています。

【新改訳 2017】創世記

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

これは神がアブラハムに示された神のご計画です。アブラハムもまた、この時のイエシュアと同じようにナーヴァト「天を見上げ」しました。このように、ナーヴァトとは本来、アブラハムの子孫、イスラエルの民が天の星々のように多くの民となることを指し示した言葉であると考えられ、イエシュアはこの神のご計画を表して「天を見上げ」られたのだと考えられます。

またイエシュアは「深く息をして」とも記されています。「うめく」という意味のアーナハ(אָנָה)がここには使われており、この言葉は本来、かつてエジプトの奴隷であったイスラエルの民のうめき、苦しみの叫びを指し示した言葉です。

#### 【新改訳 2017】 出エジプト記

2:23 イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。

2:24 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。

2:25 神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らを見こころに留められた。

このように、アーナハにはイスラエルの民のうめきによって、神が「アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされ」、「神は彼らを見こころに留められ」ということが指し示されていると考えられます。

「天を見上げ、深く息をして…」という日本語ではこのような描写は、祈りに集中するための、精神統一のような行為としてしか捉えられません。しかしヘブル語の持つその本来の意味で見ると、ここにもイスラエルの民に対する神の約束、ご計画が、決して忘れ去られることなく、必ず成就することが表されていると見る事ができるのです。

そしてイエシュアは「その人に「エパタ」、すなわち「開け」と言われ」ました。「開く、あける」という意味のパータハ(פָּתַח)という言葉がここに使われています。この最初の言及は創世記 7:11 です。

#### 【新改訳 2017】 創世記

7:11 ノアの生涯の六百年目の第二の月の十七日、その日に、大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた。

7:12 大雨は四十日四十夜、地に降り続いた。

天の水門がパータハ「開かれ」、かつて全世界を飲み込んだ大洪水、この出来事もまた「救いと滅び」が同時に表された、起こった出来事と言えます。すなわちノアの箱舟に入ったものはみな救われ、それ以外のものは大洪水によってすべて滅ぼされました。神がお選びになった者たちの救い、そして神に敵対する者たちの滅び、神は必ずこのことを行われます。その時は定まっておき、その時が来れば、神はすぐに、直ちに、速やかにこれを行われます。その事実が次の「すると、すぐに…なった。」という記述には表されていると考えられます。イエシュアご自身もこれら神のご計画の成就について、ノアの箱舟の出来事を用いてこのように語っておられます。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

24:37 人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。

24:38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。

24:39 洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。

「人の子の到来」、イエシュアの再臨は、必ず実現のものとなります。まず初めにイエシュアの空中再臨があり、そして地上再臨、これらによって今日述べた「救いと滅び」が起こり、今のこの時代は完全に終わることになります。その時は父なる神の御心によってすでに定まっています。つまり誰かの行いや何かの力でその時が早まることはありませんが、同様に、遅れたり引き伸ばされたりすることもまたないのです。つまりその時は確実に近づいているということです。

#### 4. すばらしい

【新改訳 2017】 マルコの福音書

7:36 イエスは、このことをだれにも言ってはならないと人々に命じられた。しかし、彼らは口止めされればされるほど、かえってますます言い広めた。

7:37 人々は非常に驚いて言った。「この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない人た

かつて聖書は、イスラエルの民だけに与えられたものでした。確かに神の選び、そして救いはイスラエルの民だけに与えられるものなのです。それがこの「イエスは、このことをだれにも言ってはならないと人々に命じられた」という御言葉には表されていると考えられます。しかし、今やそれは私たち異邦人にも及び、世界中に広まっています。それは「この方のなさったことは、みなすばらしい。」と認め、イエシュアを信じ、受け入れた者に言い広められたのです。ここで「すばらしい」と訳されているヘブル語のヤーフェ(יָפֶה)は本来、アブラハムの美しい妻サラを指し示した言葉でした(創世記 12:11)。サラはイスラエルの父祖であるアブラハムに結びついた最初の存在であり、アブラハムに与えられた神の約束、ご計画に、彼とともに与ることができる象徴的存在と言えます。つまりイスラエルのみに対して約束された救いを、イエシュアを、その御業をヤーフェ「すばらしい」と、信じ受け入れることによって、異邦人である私たちも、彼らイスラエルの民とともに受け取る存在となるということです。これが神のご計画です。言い広めるべき、まさに「すばらしい」良き知らせ、福音なのです。

毎年この時期は忘年会のシーズンですが、たとえ年を忘れても、神のご計画に目を向ける、神の国を待ち望むことは忘れないようにしたいものです。とかく人は忘れやすい生き物です。ですから来年も、これからも、神のご計画について聖書から学び続けてまいりましょう。聖霊の助けがありますように。